

# 考へさせる話

(幼児に就て是れだけは心得べし)

大阪齒科醫學士 高 安 光 三

## 一、序

私は連日連夜各學校幼稚園を巡回して口腔衛生の講演をやつて居りますが、至る所非常な歓迎を受けて居りますのは一つは之が實際的に生きた問題であり、一つは「喰はず嫌い」であつたこの方面の話にお觸れになつたから益々その申込みが多くなりました。或時は保護者を相手に、或る時は園児を前に、なるべく多方面から通俗的に、且つ興味的に、實際的の智識を歸納法を取つて、話してありますので力強く説く事が出来ます。幼児は喜び、中には園の先生がお腹をかゝへて、飛び出される事も少なく有りません。其の一端を茲に、

書いて見ました。

## 二、兎から

今年は兎年で御座います。兎と云ふものは後足が長いから山へ上る時は非常に早く馳け上がる事が出来ませんが降りる時となると、ちと具合が悪い、其處をねらつて獵師は兎狩をやるのです。之は鼠類と同じくよく繁殖する。一年に、廿四位よく子供を生みます。人間より遠去かる下等動物程よく子供を生む、人間は一年かゝつて唯だ一人、二百八十日間て一人しか生めない。中には二人、一諸に、又中には一度に三人と云ふ氣の早い御婦人も有りますが、兎は年に廿四位、魚は一度

に四萬匹、黴菌となると、一匹が一日後に、四七七、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇〇、勦定が出来ない程増殖します。

その兎は鼠と同じで晝はよく眠る。夜になると、起出だし悪い事をする、鼠、盗人、口の中の黴菌と同じで、夜働く、でその以外はよく居眠りをする春など山ふところのボカ／＼日當りのよい所で眠つてゐる、龜さんに起されて向ふの小山迄競走をして負けた、油断しては行けない、と皆さんに教へてくれる。夏になると、かち／＼山で狸をこらしてお婆さんの敵打をした。秋になると、月の中に入つて餅をついてくれる。支那では薬をつくると云ふ。冬になる、と兄さんやお父さん達が鐵砲擔いで棒をふり廻して兎狩りをし、皆さんが大きくなると、兎汁として、うまい／＼と舌鼓を打ちます。

兎の實驗 其の兎の兄弟を二匹とつてくる。一匹

の兎には普通の食物を與へ、今一匹には少しづつ、の白砂糖ショウ糖を毎日與へておいて二年を過ぎる。二年經つてから其の二匹を取出して試験をします。一匹の兎は皆さんの爪で齒を缺くと、堅くて爪も立たない。齒の白い所は珫瑯質と云つて鐵よりも石よりもガラスよりも水晶よりも堅い、(三分の二が無機鹽類の石灰の棒、三分の一は有機質)その砂糖をやつた方の兎の齒は爪でかくとポロ／＼と碎けてくる。これは砂糖分が悪い作用をするからであります。

皆さんは、そんな事を知らない。幼稚園から家へ歸ると、すぐお母さんに、今日の習つた事をお話する人もあるけれど中にはすぐに鞆も放り出してお母さんへ、「一錢頂戴。」近頃の子供はそんな悪い事は云はない、「十錢くれ、五錢くれ」と猶更悪いが、そのお金を貰ふと菓子屋へ走つて行く。その一錢銅貨一枚に、黴菌が約十四萬五千〇八個も

附着つてゐる。それを知らずに叮嚀な子供はそれを口の中に入れて舐ぶつて行く。そして菓子屋へ行くと、菓子屋のお神さんがその汚ない口の中に、齶齒の澤山ある口の中に、一日黴菌が四億匹も住んでゐる。その汚い空氣を紙袋にぶつと吹込んでその中に菓子を入れる。子供は喜んで菓子を喰べる。子供は確かに菓子を喰べてゐる。けれど一方から考へると、菓子の中の砂糖分が子供の齒を、更に命を喰べつゝあるのて有ります。

### 三、砂糖の害

之は諸博士の實驗が示してゐる通り精製した白砂糖を多くとると、血の中の酸度を高めて體內のアルカリ度と平衡がとれなくなる、之が次第に蓄積してアチドーデスの一定型を與へて行く。どこかしら悪くなる。遂には砂糖分を醫師から撮る事を禁じられる。營養不良になる。一方砂糖分は口の中で體溫の攝氏三十七度に温められて、酸酵作

用を起し、乳酸を造つて齒の硬組織を脱灰せしめ、他の齶齒杆菌等と共同作用を取つて遂に、齶齒を造る。故に食物を咬斷する事がむづかしくなり、勢ひ甘い菓子類を盛んにとり、内外から幼ない子供の體質を變へて行く。と結核菌に取り付かれ易い體質となる。實に、結核質の人程砂糖分を好むものであります。

### 四、幼児の死亡

其れて内外から害を受けて益々幼児が死んで行く率が高くなる。

現在、世界中で日本の幼児死亡率は世界第一である、殊に東京大阪の大都會程よく死んで行く。大阪の舊市内と新市とを比較すると、新市は益々幼児の死亡率を高めて行く。一方から考へると、新市程、駄菓子屋が多い、日本人の主要食物である米屋の六倍の菓子屋を有してゐる。その駄菓子屋は、層つて子供を生んですぐ死んだ。又生んで

又死んだ、醫者と、葬式と何やらかやて段々畜へた金は減る。遂に仕方なしに駄菓子、(一文菓子類)を賣り出す、其の菓子が他の子供の命を縮めて行く。因果應報 水車の様に死の神は廻つて行く。

故に大都市の周圍部程死亡率を増さしめて行きます。

### 五、昔

昔日本でも料理法に砂糖を使用せない。往昔には甘味料としては天然に出来る、甘類、果物の中に含んでゐる甘味……蜜柑でも、砂糖大根でも又砂糖蔗でも……又は蜂蜜、糖蜜がある。之を用いてゐる。餡は甘いものである、けれども昔の餡は辛い、何故なれば鹽をつかつてゐる、鹽あんと言ふ、今でも極く山里へ行くと、鹽あんを使つてゐる家庭は随分ある。そんなものを食つてゐる人は齲齒はない。往昔の日本人の頭蓋骨を調べて見ても齲齒は極く稀である。又原始人と同じ様な

生活を現在でもやつてゐる野蠻人類には齲齒は至つて少ない。三〇——七%位であるが文明的生活者には益々齲齒が増加して行く。我國の人々は約九〇%は持つてゐるだらう。

殊に大阪市中央幼稚園に於ては平均九十三%を示してゐる。京都市幼兒は最も多いのは京都市は昔から饅頭や飴王が名物で、今でも菓子類は随分と凝つて造つてゐる。宮内省へ納入してゐる。

鍵屋や虎屋の饅頭も名高いし、又聖護院の八ッ橋も一極名高いので之も關係が有ります。朝鮮の子供達でも文化に浴してゐる京城市内の生徒は平均五十三%を示し、朝鮮の地方の生徒は平均二十四%強を示してゐるのを見ても分ります。近頃内地へ入つて來た鮮人は内地へ來ると、齲齒が増加して來つてつい金齒をギラつかせる様になつて來ました。

○動物には齲齒が無いのは當然です、それは熱食

をせない。智恵がないから熱い元となる火を造る事をしらない。之は犬でも馬でも同じであります。之を猫舌と云います。その代り、火で砂糖を造る事も知らない、自然食が主である。であるから歯牙が強健であります。猫を飼つてある人猫の口を見て御覧なさい。齧齒等一つも有りません。犬の口を見て御覧入歯してある犬一匹も居りません。でも近頃動物園の動物には齧齒が増加して來ました。

大阪の動物園長の林先生に聞いて見ると、『近頃の動物は益々贅澤になつて來て齧齒がふへて來た。殊に甘い食物を好むもの或は反芻動物に多いのは面白い事であつて、象は齧齒が一番多く、甚だしいのは其れが爲めに骨膜炎になつて斃れるものもある。鹿やカンガルー鰐や大蛇に直齒痛があり、猿も多い、之は皆さんが動物園へ行つた時ついで食ひ残りの食物や甘いビスケット等を與へるから

であつて、『動物に、食物を與ふべからず』と立札が立てゝあるのもよく御承知の事と思ひます。

てなるべく、甘い物を食べない様に、又食べる事を教へない様に、つい無駄喰ひが過ぎると三度の御飯も食はずに駄々をこねて一時間以上かゝつて漸く一杯の飯を食ふと云ふ様な始末で之は幼稚園のどこの家庭でも困つてゐる所であります。て専門家の私達の講演はたとへそれが一時間の講演でも、質問攻めの爲に一日を放つてしまいます。

大阪でも御津幼稚園長の大道てる子女、史久室の幼稚園の藤本女史、精華幼稚園の高濱さみの女史、芦池幼稚園の戸田倭女史、集英の赤羽よし子女史、北大江幼稚園の八木、岩橋女史、九條幼稚園の渡邊先生、桃園幼稚園の米山えん女史、等は最も熱心であり且つ眞面目に之の問題を取扱つておられる。それだけ園児が幸福であり保護者に取つて國家にとつて幸福である。

現今幼稚園に於けるこの口腔衛生教育乃至教練は不可缺の要項であつて、之を意に於いてない幼稚園は實に、不具の幼稚園だとも云ふ事が出来ま

す。  
今少し、皆さんと共にこの種の教練を幼児に施して見たいと思ひます。即ち、園兒にお面白く口腔衛生の話聞かし、保護者に家庭に於ける注意をうながし、園の先生には講習會を開き又一方齒磨き教練等を實際化する事でありませふ。皆さんの幼兒の口の中は餘りに不潔である、餘りに齲齒が多い、餘りに不健康であります。それでは未來の日本が危れます。皆さんのお命を永遠に傳えるものは貴なたの子より外はないのです。  
幼稚園の兒童は國の寶で御座います、我等専門家と、園の先生と、園兒の保護者達と共に重大問題としてこの口腔衛生を今少し具體化しませふては御座いせんか。

○たゞ一人いつ迄稻を刈る人ぞ

虚子

○木曾川の今こそ光れ小鳥狩

虚子

○手を引いて踊の場マユに走りけり

虚子

○秋風に例れて悲し後の雛

虚子

○秋の灯の塵に置きし鼓かな

虚子